

24時間365日、断らない救急のために。  
救急外来・拡張リニユーアル



WEBでの「予約変更」をはじめます

令和7年4月より導入しておりますWEB予約システムは初診予約限定ですが、このたび「予約変更」の機能を追加することとなりました。(近日公開予定)(一部の診療科を除く)  
24時間いつでも簡単に予約変更が可能となりますので是非ご利用ください。

新しいCT装置「Revolution™ Vibe」運用開始のお知らせ

1心拍での心臓撮影で検査時間が短縮

心臓全体を1回転で撮影できるようになり、たったの「1心拍」で撮影が完了します。従来必須であった心拍制御のための投薬(βブロッカー等)を大幅に減らせる可能性があり、息止めが長くて疲れる、薬をたくさん使われて不安といった声を払しょくできる検査が可能です。

低被ばくで体にやさしい

人工知能AI技術ならびに自動化技術の活用により、低い放射線量でもノイズのない高コントラストな画像を提供。これまで描出が困難だった微小病変へのアプローチが可能になります。

診療費負担の軽減

薬剤を必要な分だけを無駄なく使用できる新注入システムの採用により、薬剤廃棄(環境負荷)に対応しつつ、患者さんにおかれましては診療費負担を抑えることが可能です。



4月よりMRIの更新も完了し、さらなる検査体制の強化をしております。



副院長 兼  
救命救急センター長  
武居 哲洋  
TETSUHIRO TAKEI

救急科 部長  
中山 祐介  
YUSUKE NAKAYAMA

もしもを守り、  
いつもへつなぐ。



副院長 兼  
救命救急センター長  
**武居 哲洋**  
TETSUHIRO TAKEI

救急科 部長  
**中山 祐介**  
YUSUKE NAKAYAMA

## 「断らない救急」のために 6年余りかけた拡張工事が完了

武居 哲洋 医師

2026年3月、救急外来の拡張工事が完了しました。院内で環境改善に向けたワーキンググループが発足したのは2019年12月のことです。これまでは見学に来た方がびっくりするほど、狭い場所に多くの救急車を受け入れていました。コロナ禍以前から横浜市の救急車の要請件数はずっと伸びており、年間1万台以上の受け入れ件数に対して対応するスペースが不十分な状況が続いていました。

当院救急外来の設計は、二次救急医療施設を前提にしていたと考えられます。三次救急医療施設として、このまま病院の建物を数十年使うには工夫が必要で、救急の移転も含めてさまざまな案が出ました。10以上の設計案が検討され、予算をめぐる議論に時間がかかる中、コロナ禍が始まりました。

工事の入札にも応募がなく、建築費の高騰で予算と折り合いがつかない状況が続き、当初の計画は縮小を余儀なくされました。

コロナ禍で得られた感染症対応も踏まえて、縮小案なりに使いやすい計画を何度も模索し、今年ようやく形になりました。改修工事は何度もできるわけではありません。

この建物を使い始めて21年になりますが、一般的に病院の寿命を40年とすると折り返し地点です。この機会を節目として今後、救急の機能を充実させながら、長くこの建物で診療を続けていける形になりました。

今は、私たちのミッションである『断らない救急』を継続しながら、工事が終わってホッとしています。約1年3か月、救急車を受け入れる横で工事が進み、いろいろご迷惑をおかけしたと思いますが、無事に完成して皆さんに感謝しています。

## 救急外来が新しくなり、 診療内容や災害対策が充実

中山 祐介 医師

今まで救急のスペースは、診察エリアと患者さんが待機する場所との間に壁があり、見渡せませんでした。拡張工事によって視界が広がり、患者さんの変化に気づいて声をかけやすくなりました。患者さんに接する時間が増え、より丁寧な診療につながっています。

診療エリアが広くなって受け入れがスムーズになり、お待たせする時間も短くなりました。待ち時間は患者さんや救急隊のご負担になりますし、私たちとしても気になることです。余裕をもって診療できるようになると、一人ひとりの患者さんに向き合う時間が生まれます。お待たせする時間を少なくできることは、患者さんにとっても、私たちにとっても、うれしいことです。

リニューアルに伴い、設備も新しくなりました。X線でリアルタイムに処置を確認できる透視検査システムを導入し、骨折の修復や体内への管の挿入をX線で確認しながら行えるようになりました。陰圧室を増設し、感染症への対応体制も整いました。

災害対策の面でも、災害拠点病院としての機能が発揮しやすい環境が整ってきています。診療エリアが広がってベッド数が増えると同時に、多数の傷病者を受け入れられるよう通常より多くの患者さんが入れる設計にしています。

例えば、1つの酸素エリアを2名の患者さんで使える配管を設置しました。また、救急外来にはNHKの速報が見られるテレビモニターが設置され、一般の通信システムが使えない状況でも情報収集や発信ができるよう、救急外来と災害対策室に衛星通信インターネット回線の配線も備えました。

## リニューアルによって 病院の機能が向上



武居 哲洋 医師

救急外来の面積が約700㎡から約950㎡に広がり、初療ベッドが4床から5床（うち1床は陰圧室）、観察ベッドが8床から9床に増え、新たにウォークイン診察室として感染症に対応可能な陰圧室や産婦人科に対応できる診察室も設けられ、受け入れの幅が広がっています。これまでは部屋が細かく区画され、それぞれのブースが分散していましたが、救急外来の中央にスタッフステーションが配置されて見渡しやすくなり、安全面が向上しました。

動線を見直して、救急車を使わずにウォークインで来院する患者さんと救急車で搬入される方の経路を分け、流れが整理されました。器材を格納するスペースも整理されて動きやすくなり、救急の流れがスムーズになったことで、他の診療科の入院や手術も円滑に回る効果を期待しています。

特にお伝えしたい変化として、リニューアルにあわせて複数名の救急救命士を新たに雇用し、近隣医療機関を対象に当院の救急車で地域の医療機関へ患者さんをお迎えに行くサービスを開始しました。受け入れの幅が広がった分、救急隊からの応需要請にも今まで以上にお応えしていきたいと思っています。日本赤十字社のミッションとして取り組んでいる救急・災害への対応も、多数傷病者同時受け入れ可能な医療ガス配管などの整備が進みました。

中山 祐介 医師

拡張工事によってスタッフが働きやすくなり、互いに学び合える場面も増えました。診療エリアの中央にスタッフステーションができ、情報共有がしやすくなりました。

患者さんのプライバシーに配慮しながら症例の振り返りができるようになり、それぞれの成長や多職種間の連携につながっています。

## 「断らない救急」の考え方を大切に、 地域を支える

中山 祐介 医師

当院は「断らない救急」の考え方を大切にしています。道で倒れている方を見かけたら声をかけたいと思います。目の前で苦しんでいる方に対して、あれこれ条件を考えすぎずにまず動こうと、スタッフには伝えていきます。病気で苦しんでいる方がいれば、お力になるのが私たちの役割です。

武居 哲洋 医師

救急患者さんを初期救急から三次救急に病院前で振り分ける我が国の救急システムには限界があると考えています。救急受診前には検査を受けていないことが多く、症状の軽重の判断は診察した上で慎重に行う必要があります。救急の患者さんは高齢の方も多く、丁寧な確認を心がけています。

## 横浜のインフラとして 「もしもを守る。いつもへつなぐ。」

武居 哲洋 医師

横浜市立みなと赤十字病院は、「もしもを守る。いつもへつなぐ。」という理念を掲げています。

コロナ禍を経て、私たちは改めて「病院が地域に果たす役割」を考え直すようになりました。病院は水や電気といったライフラインに近い、地域の暮らしを支えるインフラの一つです。

当院は公的病院としての役割を担い、行政からのご依頼にもお応えしています。今回の工事にあたっては、横浜市にもさまざまなご協力をいただきました。横浜市中区を中心とした地域の皆さんに何かあれば、私たちはしっかり動きます。地域の皆さんのお役に立ち、医療機関の先生方からも頼りにしていただける存在でいたいと思っています。

